

第6回

21世紀将来世代学
の構築

拠点研究会

1000年のスケールで社会と科学技術に 求められる方向性を考える

日時: 2009年 **4月2日** (木) 午後 **7時** ~

場所: 文・法学部第4・5会議室

講師: 両角光男 (自然科学研究科教授・工学部長)

「1000年のスケールで社会と科学技術に求められる方向性を考える」

自然科学研究科・教授 両角光男

「人類史を環境の側から眺めると、それは人類の無知、無思慮、貪欲によって蹂躪され、収奪されてきた。人類は、飢え、外敵、病気、過酷な気候、重労働から逃れるために、地表を半永久的に改変して食糧を生産し、都市をつくり、人口を増やし、資源を大量に消費してきた。これが地球本来の生態系や物質循環のシステムを大きくゆがめ、深刻な環境の破壊や悪化を招いてきた」(石弘之、安田喜憲、湯浅赳男『環境と文明の世界史:人類史20万年の興亡を環境史から学ぶ』洋泉社、2001年、4-5頁)「未来学というのは。。。既存の常識を一度ご破算にして、人類や地球の望ましい姿、あるいはヒトと自然や機械の関わりを見つめなおし、そこから新たな未来のシナリオを描くための意識改革の手段に他ならない。。。」(浜田和幸『2001-3000 浜田和幸と100人の未来学者』EastPress、2000年、14頁)

歴史学や未来学について、私は、まったくの素人である。しかし、都市計画の研究者として、専門家として、社会やそれを支える科学技術のありようを考えると、とりわけ、今日の科学技術が巨大化し、過去数100年かけて成し遂げた環境の改変を、数年で引き起こしてしまうことなどを考慮すると、一度、1000年オーダーの文明史的観点で、今、人々は、何を指すべきかを考えてみたいとの願望が湧いてきた。前者は博学な3人の環境考古学者が副題の視点による鼎談の記録であり、環境との調和を目標とする持続的な文明、「足るを知る文化」の重要性を示唆している。また後者は、著者が100人の未来学者や科学者とメールを使ったブレインストーミングで、今後500年から1000年の期間に考えうる科学技術の発展動向やそれに伴う社会の在り方を、リストアップした読み物である。こうした、資料を提示しながら、様々な分野におられる先生方と討論できれば面白いと考えている。

第6回

21世紀将来世代
学の構築

拠点研究会

1000年のスケールで社会と科学技術に 求められる方向性を考える

日時: 2009年 **4月2日** (木) 午後 **7時** ~

場所: 文・法学部第4・5会議室

講師: 両角光男 (自然科学研究科教授・工学部長)

「1000年のスケールで社会と科学技術に求められる方向性を考える」 自然科学研究科・教授 両角光男

「人類史を環境の側から眺めると、それは人類の無知、無思慮、貪欲によって蹂躪され、収奪されてきた。人類は、飢え、外敵、病気、過酷な気候、重労働から逃れるために、地表を半永久的に改変して食糧を生産し、都市をつくり、人口を増やし、資源を大量に消費してきた。これが地球本来の生態系や物質循環のシステムを大きくゆがめ、深刻な環境の破壊や悪化を招いてきた」(石弘之、安田喜憲、湯浅赳男『環境と文明の世界史: 人類史20万年の興亡を環境史から学ぶ』洋泉社、2001年、4-5頁) 「未来学というのは。。。既存の常識を一度ご破算にして、人類や地球の望ましい姿、あるいはヒトと自然や機械の関わりを見つめなおし、そこから新たな未来のシナリオを描くための意識改革の手段に他ならない。。。」(浜田和幸『2001-3000 浜田和幸と100人の未来学者』EastPress、2000年、14頁)

歴史学や未来学について、私は、まったくの素人である。しかし、都市計画の研究者として、専門家として、社会やそれを支える科学技術のありようを考えると、とりわけ、今日の科学技術が巨大化し、過去数100年かけて成し遂げた環境の改変を、数年で引き起こしてしまうことなどを考慮すると、一度、1000年オーダーの文明史的観点で、今、人々は、何を指すべきかを考えてみたいとの願望が湧いてきた。前者は博学な3人の環境考古学者が副題の視点による鼎談の記録であり、環境との調和を目標とする持続的な文明、「足るを知る文化」の重要性を示唆している。また後者は、著者が100人の未来学者や科学者とメールを使ったブレインストーミングで、今後500年から1000年の期間に考えうる科学技術の発展動向やそれに伴う社会の在り方を、リストアップした読み物である。こうした、資料を提示しながら、様々な分野におられる先生方と討論できれば面白いと考えている。